

令和 6 年 6 月 18 日現在

機関番号：22703

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2023

課題番号：19K19783

研究課題名（和文）高齢者の死の約1か月前を判断するアセスメント指標の尺度開発

研究課題名（英文）Development of assessment index to judge about one month before death of elderly.

研究代表者

岩瀬 和恵（iwase, kazue）

川崎市立看護大学・看護学部・講師

研究者番号：80747262

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は高齢者の死の約1か月前を判断するアセスメント指標の尺度開発を目的とした。申請者の研究結果および文献検討の結果から項目を精選し尺度原案を作成した。全国の介護老人福祉施設に勤務する看護師135名を分析対象とした。基準関連妥当性の検討、内部一貫性、探索的因子分析を行い、21項目4因子が抽出され、一定の信頼性と妥当性を有する有効な尺度であると判断された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究で開発した尺度は、看取りの準備に十分な期間と考えられる高齢者の死の約1か月前に看護師が高齢者の死を察知し、他職種と連携して看取りに向けた体制の整備へと繋げてゆくための尺度として意義がある。さらに、死を察知する指標が、経験の異なる看護師にも高齢者の死を察知する症状や変化について系統的に理解し、適切な時期に適切な看護介入を行うことを可能とすることが期待できる。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to develop a scale of assessment indicators to determine approximately one month before the death of an older adult. Items were carefully selected from the results of the applicant's research and literature review, and a draft scale was developed. One hundred and thirty-five nurses working at long-term care welfare facilities for older adults nationwide were included in the analysis. After examining criterion-related validity, internal consistency, and conducting exploratory factor analysis, 21 items and 4 factors were extracted. The scale was judged to be a valid instrument with a certain degree of reliability and validity.

研究分野：看護学

キーワード：介護老人福祉施設 看取り 死の察知

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

わが国は、高齢化に伴い、介護老人福祉施設（特別養護老人ホーム、以下特養）の施設数は増加し続けている¹⁾。また、2006年に算定された「看取り介護加算」は2009年、2015年と改定され、特養において看取り介護加算が当初の約2倍となっている²⁾。このように、終の住処としての高齢者施設の役割がさらに高くなり、国の施策でも高齢者施設は人が人生の最期を迎える場所として期待されている。このことは、高齢者施設で勤務する看護師が高齢者を看取る上で大きな役割を担っていることを意味している。

しかし、高齢者の死亡場所については病院での死亡者数の割合には高齢者以外も含まれているとはいえ、未だ病院での死亡が73.9%であり、高齢者施設での死亡の割合は7.8%しかない³⁾。特養看護師が高齢者の死を察知することは早い段階で看取りに向けたケアを行うことへと繋がる⁴⁾。一方、これまでの文献検討の結果から、高齢者施設は高齢者が最期を迎える場所として期待され、終の棲家としての高齢者施設の役割がさらに高くなっていることがうかがえる。しかし、未だ十分に看取り体制が整っていない施設が多く存在することが示されており、看取り体制を整えていくことが喫緊の課題である。そのためには、看取りにおいて、高齢者の変化を早い段階で気づくことが重要である。それにもかかわらず、死を察知する時期における研究はほとんどなく、未だ十分に知見が蓄積されていない。岩瀬・勝野⁵⁾の研究では、早めに看取りに向けて体制を整え、ケアを開始するためには、高齢者の死の約1か月前のサインを見逃さないことが重要であることが示唆されている。そして、岩瀬⁶⁾では、特養看護師は約1か月前に高齢者の死を9カテゴリー（20サブカテゴリー）の症状や変化で察知していることが示めされた。看護師が早期に高齢者の死を察知することにより、高齢者の家族と早めに連絡を取り、今後の方向性を家族を含めた関係者全員が納得できるまで話し合い、看取りへ向けた準備を整えることが期待される。しかし、この結果は特養看護師20名のインタビューを質的記述的に分析することにより見いだされた結果であり、定量的な評価はなされていない。したがって、看護実践の場においてはこの9カテゴリーを高齢者の死を察知する指標としての可能性を定量的な評価をしていくことが重要である。そして、定量的な調査結果に基づき高齢者の死の約1か月前を判断する実践可能なアセスメント指標の尺度開発を目指す。それにより、高齢者施設で勤務するすべての看護師が高齢者の死を察知でき、高齢者施設での穏やかな生活の中で家族と共に看取りの準備を進めることに貢献できると考えられる。特に医師が常駐しない特養では看護師が中心となり、高齢者の状況を把握し看取りの準備または病院搬送等の調整を行う必要がある。特養で勤務する看護師が約1か月前の高齢者の死を察知し、看護実践していくことが可能となれば、高齢者施設での高齢者の看取りが増加する可能性が高まる。それは高齢者本人にとって残された時間をいかに充実して過ごすことができるか、その貴重な時間を家族とともに過ごせるか、高齢者自身が悔いのない人生の最期を過ごすことに貢献できると考えられる。

2. 研究の目的

本研究の目的は、申請者の高齢者の死の予見に関する質的研究から見出された結果をアセスメントの指標としての実践可能性を、定量的な尺度として評価をすることであった。

3. 研究の方法

(1) 高齢者の死の約1か月前に出現する事象の構成概念の検討

初年度から、看護師によって観察された高齢者の死の約1か月前に出現する事象の構成概念を概念分析の手法を用いて検討した。

(2) 質問紙票の作成の検討

申請者の博士学位論文の結果および妥当性を評価した際に特養看護師からの自由記載で得られた項目を精査し、構成概念項目を精選した。また、先行研究で明らかになっている構成概念を検討し、項目を精選した。

(3) 高齢者の死の約1か月前を判断するアセスメント指標の尺度開発

2023年度における特養の全数（厚生労働省の介護事業所検索）よりランダムサンプリングを行い、700施設を対象とし、アンケートを郵送した。アンケートには、研究対象者の属性、勤務している施設の規模、申請者の研究結果から導き出された高齢者の死の約1か月前に察知した症状や変化の項目、先行研究で得られた項目、項目の妥当性を評価した際に特養看護師からの自由記載で得られた項目を組み合わせ自作の質問紙を作成した。高齢者の死の約1か月前に察知した症状や変化が各項目でみられたかを「1=全くみられない」、「2=あまりみられない」、「3=どちらともいえない」、「4=時々みられる」、「5=よくみられる」と、回答の選択肢を5段階評定で質問した。得点が高くなるほど特養看護師が高齢者の死の約1か月前に察知した症状や変化がみられたことがあるように得点化できる質問紙とした。本研究に対する質問・意見等があればいつでも連絡できることを文書で説明した。

得られたデータを想定される構成要素ごとに主成分分析を行った後、因子分析法を用いて構成概念妥当性を検討し、高齢者の死の約1か月前を判断するアセスメント指標の尺度を開発した。また、併存妥当性の検討に用いる尺度は、看取り実践尺度および看取りの看護実践能力尺度

とし、本研究で得られた高齢者の死の約 1 か月前を判断するアセスメント指標との相関を検討した。

(4) データの分析方法

返信された調査票結果をデータ化し、有効回答率を確認した後、単一成分（高齢者の死の約 1 か月前に察知した症状や変化の項目）ごとに基本統計量を確認した。次に、天井効果・床効果を分析し、主成分と主成分得点、および累積寄与率を求め、寄与率と累積寄与率から高齢者の死の約 1 か月前に察知した症状や変化の項目としての妥当性を評価した。さらに、主成分得点から、高齢者の死の約 1 か月前に察知した症状や変化の項目の上位カテゴリーの妥当性の検討を行った。その後、因子分析法を用いて構成概念妥当性を検討した。なお、統計分析には IBM SPSS Statistics 26 を使用した。

4. 研究成果

(1) 高齢者の死の約 1 か月前を判断するアセスメント指標の尺度開発

2023 年度における特養の全数（厚生労働省の介護事業所検索）よりランダムサンプリングを行い、700 施設（1 施設 2~3 名程度）を対象とし、アンケートを郵送した。194 名から回収され、無回答等の不備がある回答を除いた有効回答数は 150 であった。本研究は、約 1 か月前の高齢者の死を予測する尺度開発であるため、有効回答数のうち、死を予測していないおよび死後に予兆だったと判断していない 15 名を除く 135 名を分析対象とした。135 名の基本属性は、男性看護師 9 名、女性看護師 126 名であった。年齢は 50 歳代が最も多く（37.8%）、続いて 40 歳代（31.9%）、60 歳代（19.3%）であった。看護師経験年数は、25 年以上が最も多く（53.3%）、続いて 20 年以上 25 年未満（18.5%）、15 年以上 20 年未満（14.1%）であった。今までに看取った回数は 21~50 回の看護師が 36.3%、51~100 回の看護師が 20.0%であった。また、勤務形態は常勤が 94.1%であり、医師の勤務形態は 94.8%の施設が非常勤であった。

60 項目の主成分分析適用の妥当性を評価した。Kaiser-Meyer-Olkin の標本妥当性の測度の値が 0.783 となっていることを確認した。Bartlett の球面性検定の有意確立は .000 であり、 $p < 0.01$ で優位に単位行列と判断され、主成分分析を行う意味があると判断した。

また、天井効果および床効果を分析した結果、天井効果であった 14 項目を削除し、削除後 46 項目で主成分分析を行った。床効果の項目はみられなかった。主成分分析の結果、スクリープロットの結果を参考にし、因子構造は 4 因子とした。活用性の観点から、主成分を構成する主要な変数のみに項目を絞るため、値が 0.6 以上を示す項目のみ採用した。したがって、21 項目に対して因子分析を行った。その結果、第 1 因子 2 項目、第 2 因子 6 項目、第 3 因子 8 項目、第 4 因子 5 項目となった。項目全体のクロンバック 信頼性係数は 0.898、各因子のクロンバック 係数についても確認し、構成概念妥当性が確認された。項目には、精神面の変化に関する概念が多数あり、施設で勤務する看護師は高齢者の精神面の変化を観察し、重要視していることが示唆された。

しかし、このプロトタイプでは、高齢者にこれらの症状が同時に出現するのか、不定形に出現するのか不明であり、項目はそれぞれ線形独立であり、重ね合わせ可能であるという新たな仮説を立てた。同時に症状が現れた場合でも高齢者に 1 か月後の死が訪れる可能性が高くなるわけではない。したがってこのアセスメント指標の実装性について検証していく必要がある。

(2) 既存の尺度と死期を予測できる看護師との関連

高齢者の死を約 1 か月前に予測できる看護師と予測できない看護師とでは、看取りケアが実際にできているかの自己評価に違いがあるのかを、一般病棟の看取りケア尺度⁷⁾を使用し比較した。高齢者の死を約 1 か月前に予測できた看護師群とできなかった看護師群でカイ二乗検定を行った。その結果、予測できた看護師群と予測できなかった看護師群の間に有意差が認められた。看取りケア尺度 22 項目のうち、有意差が認められたものは、[直接家族に伝えられない利用者の思いを家族に伝える]、[利用者の安楽が確保されているかどうかアセスメントし、患者に確認する]、[家族の発達段階、個々の家族員の役割、関係性を知るための十分なアセスメントを行う]、[希望があれば、在宅医療への移行のための準備ができるよう援助する]、[疼痛コントロールのための鎮痛剤や麻薬の使用などについて、医師に働きかける]であった。この結果より、高齢者の約 1 か月前を予測できる看護師には、高齢者の死亡時だけでなく、日頃から高齢者とその家族に寄り添っていることが示唆された。

引用文献

- 1) 厚生労働省. “平成 28 年度介護サービス施設・事業所調査：結果の概要”. 2016. <https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/kaigo/service16/index.html> 2024.6.13 検索
- 2) 厚生労働省. “第 119 回社会保障審議会介護給付費分科会資料. 平成 27 年度介護報酬改定の概要” <http://www.mhlw.go.jp/stf/shingi2/0000073442.html> 2024.6.13 検索
- 3) 厚生労働省. 厚生労働省 “統計情報・白書. 厚生統計要覧(平成 29 年度)第 1 編人口・世帯, 第 2 章人口動態, 死亡数・構成割合. 死亡場所 × 年次別”, https://www.mhlw.go.jp/toukei/youran/indexyk_1_2.html 2024.6.13 検索
- 4) Pattison N, Carr S M, Turnock C, Dolan S. Viewing in slow motion: ‘patients’, ‘families’, ‘nurses’ and ‘doctors’ perspectives on end-of-life care in critical care.

Journal of Clinical Nursing, 22(9-10), 1442-1454. 2013. doi:10.1111/jocn.12095

5) 岩瀬和恵, 勝野とわ子. 看取りを積極的に行っている特別養護老人ホームにおいて看護師が高齢者の死期を判断したサインとそのサインを察した時期. 老年看護学, 18(1), 56-63. 2013.

6) 岩瀬和恵. 介護老人福祉施設に勤務する看護師が高齢者の死の約1か月前に察知した症状や変化. 日本看護科学学会誌. 2018.

7) 吉岡 さおり, 小笠原 知枝, 中橋 苗代, 伊藤 朗子, 池内 香織, 河内 文 (2009) 終末期がん患者の家族支援に焦点を当てた看取りケア尺度の開発, 日本看護科学学会誌, 29(2), 11-20.

DOI : 10.5630/jans.29.2_11

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 岩瀬和恵	4. 巻 第43集
2. 論文標題 介護老人福祉施設の看護師が高齢者の死の約 1 か月前に察知した症状や変化の妥当性の評価	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 大和証券ヘルス財団の助成による...研究業績集	6. 最初と最後の頁 142 146
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岩瀬和恵	4. 巻 22
2. 論文標題 福祉の現場から 看護師が介護老人福祉施設に入居している高齢者の死の約1か月前にみた症状や変化とその頻度 高齢者施設での看取りを目指して	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 地域ケアリング	6. 最初と最後の頁 54-56
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岩瀬 和恵, 勝野 とわ子	4. 巻 24
2. 論文標題 何が介護老人福祉施設で看取りを可能にするのか 看取りを行う看護師のインタビューから	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 川崎市立看護短期大学紀要	6. 最初と最後の頁 1-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15071/00000572	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件/うち国際学会 3件）

1. 発表者名 Kazue Iwase, Towako Katsuno
2. 発表標題 Characteristics of elderly whom nurses in nursing homes anticipate death two or three days before death.
3. 学会等名 22th EAFONS East Asian Forum of Nursing Scholars. (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Kazue Iwase, Kojiro Hirai
2. 発表標題 Coordinates act for other occupations by nurses at nursing homes that do the end-of-life care.
3. 学会等名 22th EAFONS East Asian Forum of Nursing Scholars. (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 岩瀬和恵, 勝野とわ子
2. 発表標題 介護老人福祉施設に勤務する看護師が 看取りに向けて行動する動機となった事象とその後の行動
3. 学会等名 第42回日本看護科学学会学術集会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Kazue Iwase, Towako Katsuno
2. 発表標題 Time of death of elderly people predicted by nursing home nurses based on mental or physical symptoms.
3. 学会等名 25th EAFONS East Asian Forum of Nursing Scholars. (国際学会)
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会 23th EAFONS East Asian Forum of Nursing Scholars.	開催年 2020年～2020年
---	--------------------

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------